
遥かな道

紫句恋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙かな道

【Nコード】

N9796B

【作者名】

紫句恋

【あらすじ】

バレエダンサーをめざす14歳の洸美ひろみは、夢に向かって努力し続けることへの希望や不安を感じながらも、自分の道をさがし続ける。

道

耳にしみついた音楽が、冨美のまわりを流れ、冨美はその中でひたすら踊っていた。

むし暑い初夏の空気に、窓から夜の風が吹き込んだ。

つま先はじんじんと痛み、体中から汗が吹きだしていた。

教室には冨美のほかに、もう誰も残っていない。

冨美は音楽をとめ、トウシューズをぬいだ。

最後まで残って練習するのが冨美の習慣になっていた。

鏡には頬を紅潮させ、髪の乱れた少女の姿が映っていた。

冨美はため息をついて自分から目をそらした。

冨美には悩みがあった。

ぱっとしない顔、内気な性格、甲のない足・・・

これらは夢をいだく彼女にとって大きなくせものだった。とくに今悩んでいるのは性格だ。

一ヶ月ほど前、思いきって先生に大事な話をもちかけた。

「先生、あの・・・」

先生はいつも練習熱心でおとなしい冨美が、めずらしく話しかけてきたので少し驚いたようだった。が、レッスンの厳しい表情とはまるで違った顔で、快く話をきこうとしてくれた。

冨美は勇気を出して、ひといきに言った。

「わたし、バレエダンサーになりたいんです」

先生は一瞬、まばたきを止めた。

先生にとつては、予想もしない展開だった。

5歳のときから、地味にマイペースに一生懸命にレッスンしている冨美ちゃんは、先生にとつてはとても好ましい生徒だった。でも、こんなにおっとりしていて遠慮がちな彼女がバレエダンサーを目指しているとは思ってもなく、まして先生から勧めるほどの実力があるとも思えなかった。

そんな彼女が、14歳になって突然こんなことを言うなんて。でも黙っているわけにはいかない。相手はとても真面目な、繊細な生徒だ。

先生はゆっくりと、慎重に言葉を選んだ。

「冨美ちゃん、ダンサーになるのはとても難しいことよ。もしずっとそう思ってたなら、もう少し早く相談してほしかったけれど・・・。

でも冨美ちゃんが本気でプロになりたいなら、わたしも今からでも最大限に協力します」

冨美はうなづきながら先生の話をきいていた。

もっと技術的な面をマスターしなければならぬこと、踊りに華やかさやめりはり、パワーが足りないこと、気が強くなければこの世界に生き残っていけないこと・・・。

また、洸美はバレエ留学についても訊ねた。

最近のコンクールなどでは、優秀なひとに奨学金と留学する権利を与えてくれるスカラシップという制度があったりする。

留学には高額な費用が必要なため、スカラシップをほしがる人は多い。

「でもコンクールでスカラシップをもらおうと思ったら洸美ちゃん、寝る間もおしんで練習しないとむりだね。

だけど、どこにも留学できないことはないの。世界にはたくさんバレエ学校があるから、私費でも行けるところはあるし。

たいへんなのは、その後よ。そのまま海外のバレエ団に就職するのはかなり無理があると思うの。それはたとえスカラシップをもらっていけるほど実力のある人でも、難しいことなのよ。そのくらい、せまき門なんです」

洸美は考えこんだ。

自分の実力にたいして、この夢はあまりにも大きすぎる・・・？

いままで何度か挑戦したコンクールも、予選を通ったり通らなかつたりでうろつろしている。

でも、先生が言った最後のひとことで心を決めた。

「大変は大変だけど、洸美ちゃんにはいいところもいっぱいあるんだから、やれるところまでやってごらん。いつでもまた、なにかあったら相談してくれていいからね」

夢

学校での洸美はいたってふつ々の生徒だった。

ふつうに友達がいて、ふつうに遊んで、ふつうにまじめに勉強していた。

ただ、洸美がバレエをやっていることはみんなが知っていた。

クラス替えをしてすぐ書くお決まりの『自己紹介カード』にはかならず

<将来の夢>

という項目があつて、洸美は小学校の時からそこだけは空けたことがなかつたからだ。

<バレリーナ>

洸美の学年で将来の夢がちゃんと決まっている人は、ほとんどいなかった。

バレエをやっている人もいない。

だから、

「へえ、宇野さん、バレエやってるんだあ。つま先でまわれるの？」

！
などとよく言われる。

将来の夢がないなんて、洸美には信じられなかった。

夢があることによつて、洸美は辛いことも我慢できたし、ある程度のことをいい加減にできた。だから学校でどんな嫌なことがあつ

たとしても、帰ればバレエがあり、未来には夢があると思えば、平気な気がした。

夢がないことが、恐ろしい気さえた。

辛いとき何のために耐えるのか、何をいい加減にして何を頑張ればいいのか、わからないような気がした。

洸美には、いつでも何か、人生の軸になるようなものがないとためだった。

夢をもっていたからそうだったのか、そういう性格だから夢をもったのかはわからない。

でも、そんなに大事な夢のことを、洸美はつい一ヶ月ほど前まで、一度もバレエの先生に話したことがなかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9796b/>

遥かな道

2010年10月28日05時20分発行